

南半球便り（その 88）：ブルーム、鎮魂の旅

8 月 30 日

日本人、そして日本の歴史を学んだ誰しものにとって、8 月は慰霊と鎮魂の月です。先々週の木曜島に続き、先週にはブルームを訪ねてきました。日本大使の訪問は、2016 年以来 6 年ぶり。今日は、そのご報告です。

1. 西オーストラリア州ブルームの位置

ブルームは、西オーストラリア（WA）州北部にあって、ティモール海とインド洋に臨む海辺の小さな町です。WA 州は、豪州の本土面積の約三分の一を占める広大な州。日本の約 7 倍にも及びます。州都のパースからでも、飛行機で 2 時間半もかかる距離なのです。

インドネシアやパプア・ニューギニアから目と鼻の先でもあり、気候は亜熱帯性。今は乾期ですが、それでも日中は 30 度を超える気温。パース、メルボルン、シドニーなどからの避寒客で賑わいます。人口僅か 2 万人ほどの町ですが、観光客が集う時には 6ー7 万人にも達するそうです。



特に白砂のケーブルビーチは、豪州大地の赤土とインド洋のターコイズ（トルコ石）・ブルーとのコントラストが実に鮮やか。カリブ海や太平洋の島々を見慣れてきた私にとっても、まぎれもなく一級品の素材です。難点は、ホテルの数が少なく予約が入れにくく、価格も割高なことでしょうか。



赤土とインド洋の青、白砂のコントラストが鮮やかなケーブルビーチ

2. 真珠が繋ぐ日豪関係

「南半球便り（86）：遙かなる木曜島」でご紹介した木曜島と同様、このブルームが日豪関係上大きな役割を果たすに至ったのも、真珠の繋がりなのです。日本からの真珠ダイバーは、19 世紀後半から第二次大戦期にかけて木曜島だけでなく、ブルームやダーウィンなど、豪州北部の要所に出向いて、真珠貝の採取に励みました。

日本政府が豪州で最初に設けた領事館が 1896 年のタウンズビル（現在のクイーンズランド州）であった背景のひとつには、こうした真珠産業を巡る活発な日本人の往来があったのです。



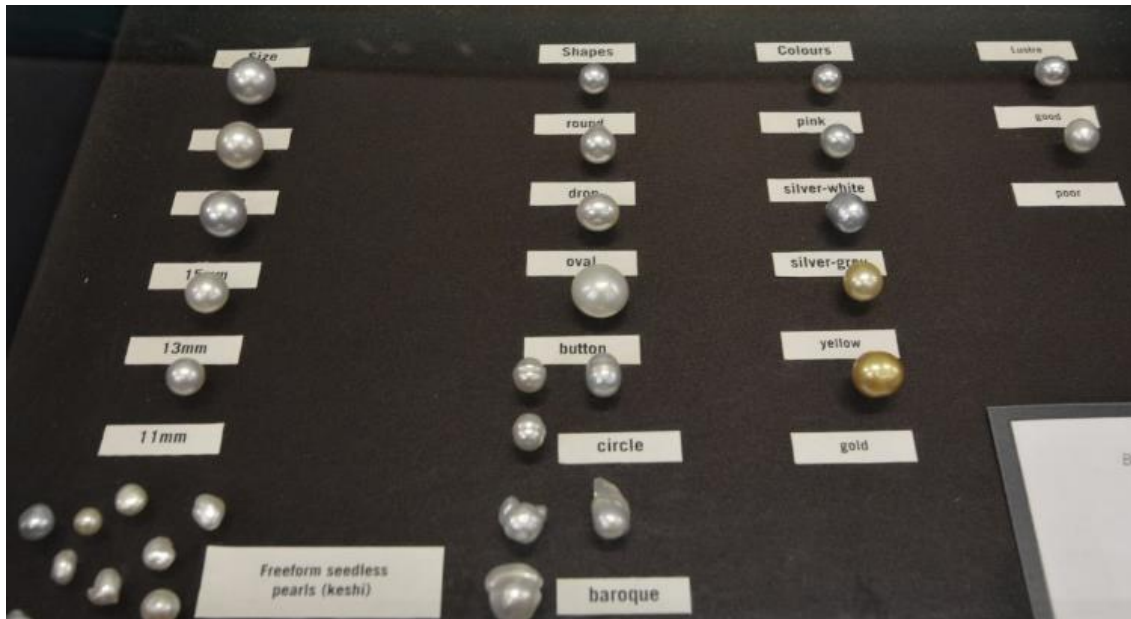
真珠ダイバーが当時着用していた潜水着（ブルーム歴史博物館にて）

ブルームでは、1970 年から在留邦人が始めた日本文化祭りの「真珠祭り」が日系社会以外にも広がり定着。町で最も重要な文化・観光行事として拡大・発展してきていると聞きました。「Shinju Matsuri（真珠祭り）」と日本語で呼ばれていること自体、嬉しく思いました。



出典：真珠祭り公式 HP

目抜き通りには、真珠装飾品を売る高級店が軒を連ねています。引き寄せられるようにいそいそと洒落たブティックに入っていく家人を野放しにしては大変な目に遭うと心配し、マンツーマンの監視体制をとりました（笑）。でも、日本ではまず見かけないような大粒で色とりどりの真珠、そしてネックレスやブレスレット、さらにはカフス・ボタンの斬新なデザインに私自身が魅せられてしまいました。ブルームの真珠産業の伝統の深みと力を感じました。



ブルームで取れる真珠の数々（ブルーム歴史博物館にて）

3. 和歌山県太地町とのつながり

貴重な発見は、多くの日本人真珠ダイバーの出身地が和歌山県の太地町だったことです。木曜島では、同じ和歌山県でも串本や有田の出身者が多かったとされることとの対比も、関心をそそりました。

実は、私には太地町への特別な思い出があります。あれは、外務省の経済局長を務めていた4年前、捕鯨問題が大きな 이슈となっていた頃でした。東京から片道6時間かけて日本の捕鯨業の原点のひとつである太地を訪問。地元の歴史と文化を形作ってきた捕鯨の実態を学ぶとともに、三軒町長を始めとする関係者の方々とじっくりと懇談をする稀有な機会に恵まれたのです。

その太地町とブルームとが姉妹都市となっているという、この縁。2007年から毎年のように太地町から中学生がブルームを訪れ、ブルームのセント・メアリーズ・カレッジからも太地を訪れているとの話を知るにつけ、世代を超えて引き継がれている交流に心が温まりました。

4. 日本人墓地

真珠貝採取には潜水病等の危険がつきもの。ブルーム町が管理する共同墓地の一角には、約1千名もの日本人潜水夫が埋葬されている日本人墓地があります。その中には、1908年にブルームを襲ったサイクロンでの犠牲者（200名以上と言われる。）の追悼慰霊碑もありました。



豪州最大の日本人墓地



追悼慰霊碑

大半は設置以来長年が経過した墓石です。でも、今までに在パース日本商工会議所や日本船舶振興会の資金援助で墓石が修理されてきたお陰で、おおむね良好な状態に保たれており、安堵しました。

地元の詳しい方から、捕鯨反対運動が過激であった頃には、日本人墓地の墓石の大半が倒されるといった事態もあったと聞かされ、大いに胸を痛めました。今は反対運動も下火になり、夜間の墓地管理も強化され、そのような心配はないそうです。墓石の下に眠る先達の心の平安を願いました。

5. ブルーム空爆

ブルームは、大東亜戦争の傷跡が残る町でもあります。日本軍によるダーウィン空襲やシドニー湾での特殊潜航艇の攻撃がしばしば語られてきましたが、ブルームも空襲の惨禍にさらされたのです。

当時のブルームには航空基地が置かれ、蘭領東インド（現インドネシア）から退却してくる連合軍関係者の脱出ルートと見られていました。1942 年 3 月を皮切りに四回にわたり空襲が行われたとの記録が現地の歴史博物館に残っています。話をうかがった博物館関係者によれば、おおむね軍事目標に攻撃対象を絞ったプロフェッショナルな攻撃だったそうですが、100 名近い方が亡くなられた痛ましい展開でもありました。

同時に、日豪開戦は、日本人真珠ダイバーの人生をも大きく変えました。日本人は全員が遠く離れた豪州南東部の収容所に強制収容されました。ブルームのアボリジニーで日本人ダイバーと結婚していた女性の中には、スパイ嫌疑をかけられたり、ご主人の後を追って幼子の手を引きながら収容所に入った方もいるとうかがいました。

戦争が終わって収容所から解放された日本人は、原則として日本への帰国を余儀なくされました。ただし、現地の女性と結婚していた場合等、例外的に豪州に残った方もおられます。戦後は 1953 年から、日本人潜水夫の入国が認められたそうです。

変転に富む、こうした歴史があるだけに、現在ブルーム町会議員を務めておられるフィリップ・マツモト氏、戦後に真珠ダイバーとしてブルームに来訪されたアキラ・マスダ氏、ツネヒロ・タナカ氏らと昼食を共にしながら懇談することができたのは、非常に貴重な時間でした。



ブルーム在住の邦人の方々との昼食

6. 和解の力

かつてなく良好だと評される日豪関係。でも、ブルームに来てみて、真珠ダイバーのような第一線の方々の塗炭の苦しみ、身を粉にした献身があってこそ、両国関係の強固な地盤となる相互信頼が形作られてきたことに改めて思いを致し、肅然としました。

毎回の地方出張の際と同様に、今回も対外発信を心がけました。そこで、ABC ラジオ・キンバリー支局を往訪し、インタビューを受けました【[その模様はこちらでご覧いただけます。](#)】その際、気づいたら、日本人ダイバーを「無名のヒーロー」(unsung hero)と呼び、戦後の日豪関係を和解の好事例と称していました。ブルームに来て実態を学んだからこそ、言えた言葉なのだと思います。



ABC キンバリー支局にてラジオインタビュー

7. 現在進行形の日豪協力

ブルーム滞在中、日本企業による世界最大の直接対外投資案件であるイクシス・プロジェクトなど、豪州大陸・沖合でのガス田開発・採取に従事しているインペックス社の関連施設を視察しました。

ブルームはオペレーションの重要な拠点。海上ガス田との間で人員のピストン輸送等に当たっているヘリコプター管理会社 PHI の施設を村山執行役員始め関係者の方々に案内していただきました。16 人も搭乗できる世界最大級の大型ヘリを運用するだけでなく、事故や疾病者が発生した場合の緊急事態・災害対応用ヘリも 24 時間待機している現場をつぶさに拝見しました。

万全の体制を敷き、今まで無事故を維持。しかも豪州人スタッフの生命を何度も救うような局面があったと伺い、誠に意を強くしました。かつての真珠貝採取に当たったの協力関係が、時代と業界を越えて今に引き継がれているように受け止めました。



インペックス社、PHI 社の皆さんと

8. 最後に

心からの哀悼の意を捧げ、日本人墓地を去る間際、懇切丁寧に案内をしてくださった現地在住の邦人の方から話しかけられました。

「大使、墓石がどこを向いているか分かりますか？」

確かに、よく見ると、全ての墓石が同じ方角を向いているのです。まるで夏の太陽を恋い焦がれる向日葵のようでした。怪訝な顔をした私に、その方は、優しいながらも力を込めてこう言われました。

「日本なんです。日本なんですよ。」



突き抜けるような真っ青な空の下、照りつける強烈な日差しと頬をなでる爽やかな風を感じながら、私は返す言葉を失い、立ち尽くしていました。

山上信吾